

藤馬七之会誌

発 同志社大学法学部「藤馬会」事務局

行 電話 (0720) 33-8635

第 7 号

新のおとし子

1996年2月 (題字・藤馬龍太郎筆)

年会費（1500円）の振り込みは…

口座名：同志社大学藤馬会 田中康博

(宇治市木幡御蔵山39-390)

富士銀行 出町支店 普通 1538207

住友銀行 伏見支店 普通 774027

京都銀行 六地藏支店 普通 856895

京都中央信用金庫駅前支店 普通 0582105

私の宝物 26冊の学生手帳

同志社大学教授 藤馬 龍太郎

先日、NHKテレビで

とである。

「私の宝物」というテーマで放映していた。それを見ていて「私にとって宝物って何だろう」と、ふと思っ
た。大学教師という職業柄、このYシャツの胸ポケットにすっぽりと納まる学生手帳を毎年愛用している。
在外研究で外国生活をしている期間を除いて、日記をつける習慣をもたない私は、このYシャツの胸ポケットにすっぽりと納まる学生手帳を毎年愛用している。
つきあっている私にとってこの学生手帳は、肌身離さず持ち歩いているこの二十七年間の同志社大学での貸借対照表であり、まさに私の宝物なのである。

が模範的な教師の着想であろう。しかしこれでは我ながら余りにも紋切型、陳腐で呆持ちなもの。宝物という限りはやはり品物であるのが常識であろう。

この手帳は、一九六九年版に始まり、一九七九年版一冊だけが欠けている（在外研究期間）ほかは、一九五九年度まで二十六冊。そのメモの内容は、文字とお

公務員から大学教員への転身の年、一九六八年は私にとつて不惑の四十歳であつた。なにもかもが新しい体験であつた。教授会での雰囲気や議論の仕方がそれ

私が愛蔵してやまない幾つかの古美術品（日本最古の印刷物「法華寺」の「百萬塔陀羅尼」―ホンモノです）、棟方志功の版画など、や貧しい量とはいえ、三十五年うて空しい過ぐるもの無し」

嵐は、その年から同志社キヤ

喜びと、ともすれば懐古的になりそうな気持ちを奮起させてくれることを知ったとき、私はようやく後悔の気持ちをかなくなり捨てることができた。それはとりわけ、熱っぽい雰囲気とピア

そして今日まで、この藤馬会を大きく育ててきてくれた役員の方々と、それら力つよくサポートしつづけてくれている八百余名の会員の皆さんに、心からなる感謝を申し上げます。

充実感の日々

鈴木悦子

藤馬ゼミ同窓生の皆様
にお元気ですか。私は第二
期生ですが、当時のゼミ
は一年間という短期間の
上、丁度学園紛争中のた
め教室の確保など大変な
論文や手紙のタイプ、会議
などの準備、研究費の経理理
全般、学会発表のスライド
作成などをしています。今
まで関わりなかった分野

藤馬会が今年で第十回を数えるとのこと、心よりお喜び申し上げます。

例年この時期は業務多忙で出席できず、ご無沙汰い

めぐまれた入院生活

大学院法学研究科 渡辺 暁彦

大学院に入ることとは、字通り「入院」であって早く「退院」できるにたかことはない、とのこかくいう私は、「入院」ですす三年、「迷惑ば」っておかしながらも、門大学院博士課程において先生にご指導を頂いています。このような私に今回、何か書くようにとの事ですので、あまり知られていない院生の立場から、簡単に先生の一面を触れてみたいと思います。

文「これだからワープロはねえ……、手書きだとそんな間違いはありません」と誇らしげにいわれます（先生はいまだ手書きを続けられています）。また、一字一句丁寧に読まれ、引用した原典まで逐一照合され、頁数の誤りまで指摘されるなど、学問にたいする厳しい姿勢を窺うことのできる逸話には事欠きません。提出問際には、「夢」の中でまで注意されたとは友人の言。

院生にとっての一大行事である『修士論文』。先生の論文指導は、院生各々の主体性を尊重しながら、主に文献や言葉遣いなどの形式的な面で注意をされるというものでした。そのため、ワープロ等の誤植や打ち間違い

その反面、「人との出会いを大切に」され、手帳にゼミ生や卒業生の名前を記して、時折バラバラ眺められている姿はいへん印象的です。最後になりましたが、さらなる藤馬会の発展をお祈り申し上げます。

鮮やかな一コマ

木村 広希

藤馬会が今年で第十回を数えるとのこと、心よりお喜び申し上げます。

例年この時期は業務多忙で出席できず、ご無沙汰いで早や十年、真新しい田

Three shaded triangles arranged in a triangular pattern, with one triangle at the top and two below it.

OB通信
く北から・南からく

ですが、人間の命を守るため
の研究のほんの一部にで
ません。

思っています。
(67年度生)

国人の人権と行政の対応方 藤馬会の益々のご発展を
針について研究を進めてお 祈り申し上げます。
ります。先生のご指導を活
(86年度生)

[illegible]

～現役生 今年度活動報告～

四回生就職状況

五里霧中

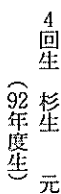
就職活動は「超氷河期」と評されるほど、内容も結果もより一層厳しいものとなりました。

民間企業志望者は連日、複数の会社説明会や面接に追われ、志望する業種か否かを問わず、とにかく数多くの企業を訪問することに懸命にならざるを得ません。面も見られます。しかし、来年以降司法試験などを受験する予定のものを含め進路未定者の三割程度と、今年度の厳しい状況を物語る一面も見られます。

でした。また一様に厳しかった企業側の反応は、私達の危機感と焦りに拍車を掛けるといふ悪循環を生んでいったように思います。おかげで前期中のゼミはおろか、他の講義にも出席する暇が無いほどでした。

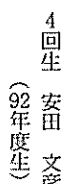
今後とも、社会に出る者出ようとする者に対して先輩方の厚いご支援、ご指導をお願いし、簡単なながら今年の進路状況のお知らせと致します。

4 回生 杉生 元
(92年度生)



から始めよう

「という訳で僕達の発表を終わります。何か質問のある人……」。この瞬間水を打った様に教室が静まる。



制にまで及んだ為に、互いにかみ合わず困った。議論は堂々巡りを繰り返し、図書館の地下のソファで何時間も語り合った。

そしていよいよ台同せゝ。体調が悪く声の出ない私は、ディベート前半不完全燃焼だったのが、反駁の最終ラウンドでは、あの図書館での熱い議論の一端を見せられたかなと思う。でも、当日のそれよりもっとレベルの高く、スケールの大い議論をあの図書館のソファでしていたことを合同ゼミ担当者はみんな自負している。

本音を言えばもっといいものを作り上げたかった。最後に、藤馬ゼミの後輩に期待する。自分をありのままだに表現することは難しいが、それを可能にするのはテクニクではなく結論は「情熱で包まれた論理なんだと思う。ゼミを通して、憲法そのものよりも自分を表現する力をぜひ身につけて欲しい。」

はじめ総勢約五十名にものぼりました。第一日は、豊川稲荷に参拝し、そこで昼食をとりました。そして、フラワーセンターで多種多様な花を見て、旅館に向かいました。夜は、オリック・ス・ブルーウェーブのパ・忘れ楽しました。午後からは、西浦温泉に向かって移動し、温泉につかり、疲れをいやしました。夜はおいしい食物を食べて、カラオケで親睦を深めました。三日目は、お菓子の城を訪れ、お菓子作りの過程を見

三回生活動報告

リーグ優勝とちようど重なり、阪神大震災で被災したより一層、打ち解けること

ゼミ生もあり、感無量、非常に盛り上がりました。二日目は、午前中、自由行動でソフトボールをする者や海を見に行く者に分かれ、それぞれに時間が経つのも

に役立った三日間だったと思います。

授業では、毎回四人ずつが、自分達の興味のある憲法に関するテーマを発表して、その後、他のゼミ生が

西村修

私が入学した頃は学生運動はもう下火になっていましたが依然、続いており、またオイルショックによる不況と混乱していた時期であったと思います。そして学生達にとり、一つの指針になっておられます。また大学の正門にあった新島先生の石碑「良心ヲ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来タランコトヲ」の意味を時折、かみ締めながら、大好きな生徒達と共に

っは現在同様、就職の 毎日を中学
 極めて困難な時期でもあ 校で切磋琢
 りました。友人達は就職 磨いたして
 活動に東奔西走の毎日デ おります。
 した。私はのんびりした (72年度生)

金子真実

ました。しかし冬の山陰地方は相当、風も強く寒いものでした。その時藤馬先生に「西村君、このコート着るか」と声をかけて戴きました。私は先が寒くなるだろうと思

卒業してはや七年、結婚し、子供を育てながら、働き続けて来ました。私が参議院事務局に勤めることになったのは、藤馬先生の奨めによるものです。初めの三年間は、議会部門で議事

東から・西から

いった興味深い仕事も多く、忙しくなってきました。そんな時、ブラブラと何をやるでもなく散策した京都の町並みが、無性に恋しくなるのです。

(85年度生)

竹中功

私は一九七一年度入学生であるにも係わらず四年間のうち後

期試験が二度、パリストのお陰でなくなり、優秀な成績で卒業させていたのだ身であります

その上、内部出身者（同市社香里）ということ、どの程度の出来であったか、皆さんのお察しの付く通です。

ところが同志社大学の、それも法学部の、それも芝馬ゼミ出身という事で、あの悪名高き、毎度お騒がせの本興業株式会社に入社してしまったのです。藤馬先



～事務局より～

京都御所の寒
梅もほころんで
まいりました。
「龍のおとし子」
第7号をお届け
いたします。

皆様に楽しく読んでいただきたいと願ひ、四回生の比嘉香織さんの御協力の命に編集に取り組みました。快くごりました藤馬先生いました現役生の皆様

たどられた二十七年と短期間ですが、それから十年を同志社で過ごしました。学生生活の思い出に、この「龍の馬」を藤馬ゼミの記念として残すことが思っております。

吉岡 佳美
(92年度生)